

伊 太 利 と こ ろ

(十三)

瀧 川 規 一

【ボムペイの建築物の時代(二)】 ボムペイ第三期の建築物に屬する高尚にして巨大なる建物はカサ・デル・ファウン(Casa del fauno)である。建物の前面は紀元前二世紀の凝灰岩である。フォウンは一名セータ(Satyr)と云ひ妖物である。鼻低く容貌醜く、山羊の耳と尾とを有し常に真裸にして陽物と濃毛とを露出し頭髮長く延ばして捲き縮れ、強健なる體格を有し常に舞踏の姿勢をなしてゐる。彼は酒の神バッカス(Bacchus)に侍してゐる男性の侍者である。朋輩にはブックカンテ(Buechante)と呼ばれる、女性妖物が居り共に酒に浸たり踊を事としてゐる。この家のタスカン式の廣間(atrium)に踊れるフォウンの立像があるので、この家をフォウンの家(Casa del fauno)と稱せられてゐるの

である。今日その模造品がこの家の雨水受けの庭(impluvium)に建てられてある。この家には實に見事な出來榮えのモゼイックがあつたが今はナボリの博物館に收められてゐる。入口の通路には切嵌細工で HAVE と書かれてある。その意は歓迎の意である。屋内には列柱廊 Peristyle が二つあり一つの廣間がある。入口の通廊には彩色せる敷石があり白堊の祠堂が幾つもある。壁畫を作るには大理石及び石材を模した漆喰を塗りその下に鉛板を釘にてうちつけ以て漆喰の濡めることを防いでゐると云ふ。鐵釘が非常に數多く打ちつけられて居り一碼四方に百六十本以上もあつたと云はれて居り、今日も此處彼處にその痕跡が残つてゐる。

廣間の兩側には左に寢室(Cubicula)が三つ

あり右に二つあり、右側の寢室には硝子窓がある。この硝子の存在は非常に珍奇なものであるとして尊重されてゐる。小廣間がこれに隣接しコリント式の凝灰岩の四柱がある。これを四柱式廣間 (atrium tetrastylum) と呼ばれてゐる。その他幾つかの寢室及び家事室がある。タスカン式廣間 (atrium tuscanicum) の左右の端には小室 (ala) があり背後に食堂がある。この兩小室は秋の間又は冬の間として別々に用ひられる兩室の間にはヴェランダ式のタブリナム (tablinum) と稱せられる柱廊がある。こゝでこの家の女主人の骸骨全部が発見された。地震の際家の貴重品を携へて避難せんとしたらしく、身には貴重な裝飾品、寶石類、例へば蛇形の純金の腕輪二つ、數個の指輪、耳輪、銀製の花入れ鏡面及び貨幣等が死體と共に発見され、何れもナポリの博物館に収藏されてゐる。北の端には柱廊があり側方にはアトリウム (atrium) がある。柱廊の右側には脱衣室、浴室があり、大きな臺所がある。厩では一人の大人の骨格と三人

の小供の骨格とが発見されたと云ふ。人間の他に二頭の雌牛の骨格が発掘され何れも博物館に収藏されてゐる。第二の柱廊は非常に大きくその入口は二階になつてゐる。敷石の嵌込細工は既に述べた如くナポリの博物館に収藏されてゐるが、タスカン式廣間の入口の敷居附近の嵌込細工には二つの假面とその周圍にリボンで結びつけられた果實花卉がある。左側の小室の中央に三羽の鳩があつて、一つの小宮から一つの首飾を嘴でつまみ出してゐる。右側の小室の細工は稍粗であり一疋の猫が一羽の小鳥にとびつかんとしてゐる。下手には二羽の家鴨、燕鳥、魚類貝類がある。小室の右側にある食堂には葡萄の蔓で作られた花輪をもつた羽翼を生やした小童が豹に跨つて居る。小室そのものには黑白緑の三色の菱形の嵌込小石で、六面體の立體が逆に立つて居り、周圍には白色嵌木がある。小室の左側にある食堂には幾多の種類の魚及び海獸がある。第一柱廊及び第二柱廊の間にはコリント式の漆喰の冠石を有する紫色の圓柱及小柱を

有する戸締りのなき廣間がある。これをエクセドラ (exedra) と云ふ。この室には有名なイサス (Issus) の戦に於て歴山大帝がペルシャ人と戦つて大勝を博した戦鬪の光景のモゼイックがあつた。恐らくこの嵌込細工程精妙なものは未だ他に見ないであらう。これ丈けでもナポリ博物館を訪れる價值がある。ペルシャの王大ダリアス (Darius) が戦車に乗つて、追撃の希臘人から逃げんとしてゐる王を庇つてゐる一人の波斯兵が居る。馬上の歴山大帝はこの兵士を刺し殺さんとしてゐるのである。

後年の發掘の結果この家の下に他の家の基礎のあることが判つた。この家の主人は他の家を買収して擴張をなしたらしい。柱廊に圍まれた見事な庭があり入口から覗くと廣間小室柱廊エキセドラが感じよく配置されてゐる。

第三期の建築は實に希臘式の全盛期であつて當時の趣向の高尙にして雅味のあつたことを窺ふに足るのである。

第四期は建築その他諸藝術の衰退期である。

紀元前八〇年より紀元後七九年に至る羅馬時代である。

この時期の建物は大理石と大理石代用の白色の石灰岩片 (travertine) とより成り帝政時代の建物は溶岩、凝灰岩から成り建物の四隅と戸口の柱は煉瓦若くは煉瓦形の凝灰岩及び石灰岩で作られてゐる。角石塊石は用られて居ない。建物は羅馬時代であるが壁畫は希臘の壁畫で人物畫がある。人物は大抵希臘の神話からとつてゐる。この期の建築物の例を舉ぐれば第一に圓形闘伎場 (amphitheatre) がある。ボムペイの圓形闘伎場は伊國にあつては羅馬その他にある圓形闘伎場よりも古い。紀元前七〇年頃に建築を始めオーガスタス (augustus) の生前中に完成された。その費用を出した人は C. Quinctius

Valgus 及び M. Porcius の兩人である。建造物に銘記された文字は缺損あるが、これを明示してゐる。その銘記は C. QVINCTIVS C. F. VALGVS M. P. ORCIVS M. F. DVOVIR[?] QVINQ [VENNALES] COLONIAL HONO-

RIS CAVSSA SPECTACVLA DE SVA PEQ
[VNIA] FAC [IVNDA] COERCARVNT) ET
COLONES LOCVM IN PERPETVOM DED-
ER [VNT] と云ふ長き記銘である。括弧内は
缺損字を補つたのである。闘伎場の形は楕圓形
である。長さ百四十八碼、幅百十四碼である。
一八一六年の發掘の際には壁畫に闘士が伎を闘
はせるものがあつたさうであるが、今日では原
物が一つも残つて居らず只その模寫のみがナポ
リ博物館に展觀されてゐる。壁龕のうちに C.
Cuspius Pansa 父子の立像があつたと云はれて
ゐる。羅馬のコロシム (colosseum) には闘伎
場の下には地下室があるが、こゝでは地下室が
全くなう。觀覽席は三つに劃されてゐる。基底
の階 (tier) は五段であり第二階は十二段であり
第三階は十五段よりなつて居り、何れも凝灰岩
で作られてゐる。基底の階には只四段からなつ
てゐる特別席がある。これは町の役人の席であ
る。第三階にはギャラリがあり婦人席となつて
ゐる。オーガスタス皇帝の命令によつて婦人は

伊太利と云ふ

只この上階にのみ席を許されたのである。

第二階の第一段の下には圓蓋の通路 (Kryp-
ta) がある。單段を上ると第一階に達し復段を
上ると第二階の底の周路に達する。第一階と第
二階との間は低壁と通路によつて區劃され第
二階と第三階とも亦低壁によつて隔てられてゐ
る。キプタは南北の入口にもあり西側には二つ
ある。第三階の最上段と市城壁との高さの處に
高臺がある。圓形闘伎場の全部の石材は溶岩凝
灰岩及び石灰岩である。觀覽席の收容力は二萬
人である。西側には他の側の入口よりも暗くて
狭いアーチ形の出口がある。これは殺された闘
士を搬出する爲めに使用され、リビチナの門 (P.
orta Libitina) と云ふ。Libitina は屍體の女
神である。二つの大入口とこの屍體の門に接し
て第一階の處に猛獸を入れておく室があり、闘
士の出入を自由にする爲めに北側の入口には棒
杭が立てゝある。上階の頂上には日除けがあつ
たらしい。圓形闘伎場を見る時には史劇に見る
闘士の奮闘を目前に見る心地がする。

第四期に屬する偉大なる建物はアイシスの殿堂 (Tempio d'Iside) である。羅馬の共和政の終末前に建設された。祭られた神様は埃及の神アイシスである。伊太利の海岸の都會は埃及の歴山港と交通が頻繁であつた。共和政の時代に於て外國の神を崇拜することを禁じてゐたが、是等の海岸の都會に於ては市民は政府の禁制を犯して外國の神を信仰してゐた。ポムペイに於てそれが最も盛であつたらしい。紀元前第一世紀の半頃に於ては政府の命令によつて幾多の外國の神の殿堂が破壊された。アイシスの殿堂は紀元前六三年の地震の爲めに破壊されたが、その後再建された。再建の奉獻者は年齢六歳の Numerius Popidius Celsinus である。この寄進に酬ゆる爲めに市の十人組の組頭等はこの小供に市の顧問たる資格を與へた。また兩親もこの小供に有力なる位置を作つてやりたいと思つたのであつた。この兩親はもとく解放された奴隷であつた。父の名を N. Popidius Ampliatus と云ひ母を Cornelia Celsa と云つた。N. Po-

PIDIUS AMPLIATUS PATER P(ECVNIA) S(VA) とこの父の姓名を刻した祠堂がある。内側に安置せるバツカスの立像を寄附し、神祕の儀式を行はるゝ奥殿の嵌込細工の敷石も亦この兩親及び息子の寄進になり嵌込細工によつて其名を永久に傳へてゐる。然し今日ではこの嵌込細工は全く存在を失つてゐる。この神秘教の信仰者が増加するにつれて増築されたらしい。圓柱の間に六つの祭壇があり殿堂は廣い柱廊で圍まれて居る。入口近くの隅には穴があり奉納物の殘部を藏し、地下室には聖水を貯へる處がある。殿堂前には祭壇があり七段を登れば堂内に入る。地下室の前壁には埃及の神を祭る二個の龕がある。階段の左側の柱には形象文字と諸神の繪と及びホーラス (Horus) の神に仕へた僧侶等がオシリス (Osiris) の神に獻げた長き祈禱の文句とを書いた板があつた。ホーラスの神は埃及の光と太陽との男神であつて、男神オシリス (Osiris) 女神アイシス (Isis) の間に生れた。アイシスの夫の神オシリスはアイシスの兄

であり太陽の神ではあるが、その兄弟である暗黒の神セト(Set)によつて或る夕殺ろされた。兩人の間に生れた子であるホーラスは父の死後生れたのであるが父の仇を報じセトを征服し新にオシリスとなつた。アイシスの神の崇拜は一時希臘及び伊太利に多くの信者を有し、その高尚なる道德と死後の幸ある清淨なる生活の約束とによつて信者を増した。同じく埃及の下界の神セラピス(Serapis)の殿堂は既に紀元前五百年ポツオリ(Pozzuoli)に建てられ三十年後にはボムペイでアイシスの殿堂が建てられたのである。

神々の繪は地震の際に僧侶等が持つて遁れたのではないかと思はれる。然し地下室の後ろの壁と柱廊の西南壁には埃及の諸神の立像が立つてあつた。これ等の立像及び C. Norbanus Sorex の青銅の首をもつ柱その他の貴重品は今日ナポリの博物館に陳列されてある。キュリアイシアカ(Curia Isiaca)と呼ばれる大きな室が殿堂の背後にある。この部屋の壁畫はよく保

存されて居る。埃及の風景を描き、美神アイオ(Io)が埃及に到着しアルガス(Argus)によつて護られて居る處を描いて居る。これも亦ナポリに移轉してゐる。抑もアイオはイナコス(Inachos)の娘であり素敵な美人であつたので、ジュピタ(Jupiter)の神が彼女を追つかけた。ジュノ(Juno)の神は嫉妬深くなつて彼女を雌牛に變形せしめて百眼を有するアルガスに番をさせた。ジュピタはマーキュリアス(Mercurius)を送つてこの雌牛を捕へさせうとした。マーキュリアスはアーガスを殺ろし、ヘラ(Hera)は蛇を送つて雌牛を苦しめた。アイオは遂に狂氣になつて世界中を彷徨し遂に埃及に到達した。ジュース(Jeus)の神は彼女を原の人間の形に復歸せしめた。彼女の子のエファフオス(Ephaphros)は後に埃及の王となつたのである。

これ等の畫及び大理石の卓子、木製の立像の殘部や僧侶の所持品ガラー(sistrum)及び雛鳥の骨その他四基の木製の立像、その大理石の頭部手趾等をはじめ緑石の埃及の神像、土器硝

子器及び鉛器などが發掘され何れもナポリ博物館にある。外廊の一方には僧侶の宿舍がある。

第四期に屬するものには更にヂユースの殿堂(Templum Jovis Meilichi)と云はれる小殿堂がある。今日は全く壞れてゐるが羅馬の殖民が行はれた最初の頃に建てられた。もと公會所にあつたジュピタの大殿堂が紀元前六十三年に地震の爲めに大破した後三神ジュピタ・ジュノ(Juno)・ミネルヴァ(Minerva)を祭つてゐたものらしく、その土製の像が地下室で發見された。以上建物の四期を知ると共に壁畫の四期を知らなければならぬ。

新著紹介

○日本經濟の最近十年

改造社出版 六年一月十日發行 定價十五圓

全國經濟調査機關聯合會創立十周年の記念事業としてこの四六倍判二千頁の大冊子の出現したことは何といつても慶福すべき事實である、本書項を集むること三十七、いづれも官廳、會社、新聞社等の責任ある報告であつて、農産、林産、

水産、鑛産をはじめ工業界では電氣、造船、蠶絲、紡績、染料、窒素等及び、海運、空運、外國貿易及我國財界の展望等最近十年間の發達をいかにも簡明直截に叙述してある、ことに海外拓殖の進運についても十分の調査報告があることは喜びの限であつて、我等は本書によつて正確にして且豊富なる日本地理及經濟地理上の教授資料を得ることの多大なるを感ぜざるを得ない。片々たる報告でなく、これ遂に集められた調査會の努力に深甚の謝意を表する。(藤田)

○印度漫談

泉芳瑛著 京都人文書院發行 昭和六年一月十五日 定價二圓三十錢

大谷大學教授泉芳瑛氏の印度旅行記の總仕舞である、四六版四〇四頁手頃の本で、裝幀もアジャントに滞在六十日壁畫を描寫した井上畫伯の手になつてゐて氣がきいてゐる、目次動物篇、植物篇、事物篇、風俗篇、神話篇、文學篇、佛蹟篇、史蹟篇といふ八篇と印度からロンドンへの叙事である、地理學者の觀察録ではないが佛教學徒の印度遊歴である丈けに、常人の紀行とはちがつた面白味があるのがうれしいのみでない、行文流暢、直に巻をおく能はざらしむるものがある京都の人文書院はあまりしれてゐない本屋かもしれぬが、かうした氣のきいた本をだすところであるを併せて報告しておきたい。(藤田)

○御室の櫻

香山益彦著 大本山仁和寺

著者は御室の舊臣の家に生れて京都府立第二女學校の教諭